Steel Landscape 鉄の点景

独楽（こま）

最近は独楽で遊ぶ子供を見かけなくなったが、多くの読者にとって独楽は、子供時代に熱中したことのある懐かしい玩具ではないだろうか。そんな独楽の中でも、特に鉄と関わりのある「ベーゴマ」と「鉄胴独楽」の歴史をご紹介したい。

貝の独楽からベーゴマへ

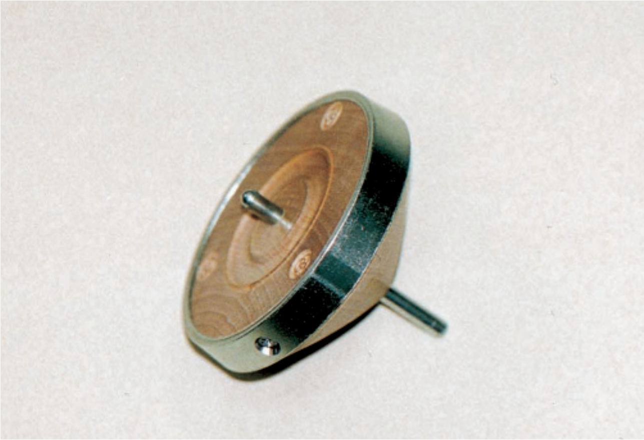
ベーゴマは、巻貝を平たく変形させたような形をしている。この形は、ベーゴマがその昔、巻貝そのものでできていた名残といえるだろう。

その巻貝の殻を紐で巻いて回す遊びが江戸時代からあった。もちろん、貝をそのまま回すのではなく、穴のあいた根元の部分を切って平らにしたり、あちこち削ったりして、よく回るように加工した「貝（ばい）独楽」と呼ばれる独楽が使われていた。いつからこの遊びが始まったのか、はっきりしないが、江戸時代の文献『和漢三才図会』に書かれているので、この時代にはあったことがわかる。

この「貝（ばい）独楽」遊びの目的は、「勝負」である。相手の独楽をはじき飛ばし、どちらが長く回っているか。勝負となると、勝つために工夫が凝らされるのはいつの時代でも同じある。「貝独楽」にも、より持久力と攻撃力をつけるために、底（先端）の尖った部分に砂や鉛などを入れ、重心を下げ安定化を図る工夫が凝らされた。

文明開化の頃になると、「貝独楽」の形をまねた真鍮製の独楽、「しんちゅうばい」が登場。続いて鋳物製の「鉄貝（かねばい）」が衝撃的なデビューを飾る。「鉄貝」の威力は当時の子供たちにとってショックだったらしく、郷土研究誌『上方（昭和15年）』の記事中で、記事の筆者は当時を振り返ってこのように書いている。『～今度の欧洲戦（第一次世界大戦）に現われた独逸の一大タンクのごとく、突如として現はれた新兵器、鉄貝のために（貝独楽は）散々に打ち破られ～』。この鉄貝こそがベーゴマであり、「ベー」とは「貝（ばい）独楽」の「ばい」が訛ったものだと言われている。

上はペチャ（直径2.7cm）右はペ王（直径3.4cm）と呼ばれたベーゴマ。



最もオーソドックスな鉄胴独楽

戦後のベーゴマ

第二次大戦中は金属の統制令でベーゴマは姿を消すが、戦後に再び町の駄菓子屋に現われはじめ、金属製玩具のなかでは比較的簡単に製作できるということもあって、すぐに戦前にまさる普及ぶりを見せた。

戦後版のベーゴマには、それまでにないいくつかの特徴がある。

まず、背が低く（薄く）なったこと。背が低いほど相手のコマの下にもぐり込んではじき飛ばしやすいのだ（ただし、回すのが難しいという難点もある）。また、八角形のものが登場したこと。従来の円形に比べ、八角形の方が、より強力に遠くへ相手をはじき飛ばすことができる。そして、ベーゴマの模様も様々なものが現れ、高度成長期には「力道山」、「川上」、「王」、といった花形スポーツ選手の名前をかたどったものが人気を博した。

ベーゴマの作り方

鋳物の町、埼玉県川口市に国内でベーゴマを大量生産している工場が一つあったが、残念なことに今では生産中止の状態が続いている。そこでのベーゴマは、次のように作られていた。

まず、面のデザインが決められ、そこから木型が作られ、さらにそれを元にしてアルミの種型が作られる。次に、この種型に枠を取り付け、そこに鋳物砂と粘着剤（コーンスターチ）を水で練ったものを流し込み、凹んだ砂型を作る。こうしてできた砂型に、溶かした鋳鉄を流し込み、固まったところで砂型を壊す。表面をきれいに研磨して出来上がりである。特別に凝ったデザインでない限り、比較的手間がかからず製造できる。

鉄胴独楽は、けんか独楽

「貝独楽」とはまったく別に木製の独楽は、唐時代（7～9世紀）の中国から高麗（朝鮮）を経て日本に渡来したといわれる。平安時代は貴族の遊びであったが、江戸時代になって庶民に普及した。

その木製独楽の胴のまわりに鉄や銅、真鍮などをはめた独楽を「鉄胴独楽」といい、ベーゴマ同様、勝負を争うために使われる。

この勝負は「ぶっつけ」あるいは「けんか独楽」などと呼ばれ、やり方はいろいろあるが、自分の独楽を相手の独楽に衝突させ、その回転力を弱らせて倒す、というのが全国各地で多く行われているやり方である。

さて、この鉄胴独楽は、江戸幕末天保の頃に、浅草の玩具商、美濃屋文翁という人が作り出したといわれている。鉄胴独楽は、それまであった木製のものに比べ回転力と攻撃力が優れていて、少年たちの間でまたたく間に流行し、明治期には流行の絶頂を迎えた。

胴にはめる鉄の輪は、始めの頃は地金を巻きつけていたが、これでは量産できないために、大正6、7年頃から鋳物が使われるようになった。けんか独楽の激しいぶつけ合いに耐えるように、鋳物製の輪は特別に厚く作られる。そのため、鋳物製の鉄銅独楽は地金ものに比べて非常にごつい外見をしている。

ところで、重い鉄の輪のついた独楽をぶつけ合うこの遊びは、決して安全とは言えなかった。ぶつけた独楽がはずみで真横になって車輪のように疾走したり、ぎゅっと巻いた紐が崩れてすっぽ抜けた独楽が子供のおでこに当たったり…、と、相当に激しい遊びであった。明治時代の風俗を綴った『明治世相百話』にも、けんか独楽は『危険遊戯』などと書かれている。

現代ではコンピュータゲームなど新式の遊びが主流になり、子供がおでこに独楽をぶつける心配はなくなった。しかし、そこに寂しさを感じる世代も少なくないのではないだろうか。

■参考文献

『日本のおもちゃ遊び』（朝日新聞社）